

明確に定められたのです。

9月25日には、病を押して、門下に対し、立正安国論を講義されました。

弘安5年(1282年)10月13日、大聖人は御入滅に先立って再び日興上人へ付嘱され、日興上人を身延山久遠寺の別当(住職)と定められました(池上相承)。

同日、日蓮大聖人は、池上宗仲邸で61歳の尊い生涯を終えられたのです。

(Living Buddhism, March-April 2009, pp. 40-45, May-June 2009, pp. 34-39; 大白蓮華 07年10月号 74頁~80頁)

【第3部 池田SGI会長講義 勝利の経典「御書」に学ぶ】

第1回 佐渡御書(上)

最極の生命を仏法のために使う

世間の法にも重恩をば命を捨て報ずるなるべし又主君の為に命を捨る人はすくなきやうなれども其数多し男子ははぢに命をすて女人は男の為に命をすつ、魚は命を惜む故に池にすむに池の浅き事を歎きて池の底に穴をほりてすむしかれども魚にばかされて釣をのむ鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝にすむしかれども魚にばかされて網にかかる、人も又是くの如し世間の浅き事には身命を失へども大事の仏法などには捨る事難し故に仏になる人もなかるべし(956頁8行目~957頁1行目)

本抄の冒頭には、思いがけない事故や事件、あるいは戦乱などに巻き込まれて命を落とすことを通して、あらためて、誰もが自分の身命を大切にしていることが説かれます。しかし、その一方で、世間の倫理観・価値観に従って、あえて自らの命を捨てることも少なくないと指摘されています。

それとともに、命を大切にしているつもりで、結果として愚かにも捨ててしまう場合も多い。ここで示されている魚と鳥の習性は、大聖人が読まれた『貞観政要』などにも説かれる先人の洞察です。「餌にばかされて」とは、せっかく自分のために、あれこれ用心していながら、目先の欲望に突き動かされたり、狭い料簡から判断を誤ったりして、結局、身を滅ぼしてしまうことを譬えています。現代も、こうした「人間の愚かさ」は全く変わらないと言わざるを得ません。

だからこそ、大聖人は、「世間の浅き事」のために命を捨てるのではなく、「大

事の仏法」のためにこそ一番大事な「身命」を捧げるべきであると教えられているのです。

「不惜身命」といっても、真実の仏法は、いたずらに命を捨てる「殉教主義」などでは断じてありません。牧口先生、戸田先生、そして私は、「尊い学会員から一人の殉教者も出さずに広宣流布を進めていこう。そのために自分の身が犠牲になることは本望だ」との覚悟で行動してきました。これからも、これが創価学会の代々の会長の精神であらねばならない。

皆さんは、尊い命を絶対に無駄にはいけない。青少年の皆さんも、どんなに辛いことや苦しいことがあったとしても、それに負けて自分や他人の命を粗末にするようなことが絶対にあってはならない。皆さまの命は、何ものよりも尊極な、不思議なる仏の生命だからです。

それでは、それほど大切な命を「大事の仏法」に捧げるとは、具体的に、どのような実践をしていけばよいのでしょうか。

大聖人は、末法の凡夫成仏の在り方を次のように教えてくださっています。

「ただし仏になり候事は凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり」
(1596 巻、白米一俵御書)

ここに究極の不惜身命論があります。末代の凡夫は、雪山童子のように身を投げるのがなくとも、「志ざし」によって「不惜身命」の実践をするのと同じ功德を得ることができると、力強く御断言されているのです。

「心こそ大切」です。仏法のために、正義のために「一念に億劫の辛勞を尽くす」ことです。私たちにとって「不惜身命」とは、恐れなく南無妙法蓮華經を唱え抜くことであり、世界のため、未来のため、人々のために、懸命に信心の実証を示しきっていくことに尽きるのです。

牧口先生は、この生き方を「不自借身命の大善生活法」と呼ばれました。

大善生活法とは、独善や臆病を乗り越え、自他共の幸福に尽くすことです。そして、これは「一度意識的に実証され、誰れにでもできることが解って見ると、最早誰れでも仕たくてたまらぬ、仕なければならぬ平凡の生活法であり、人並みの人間道である」。

ゆえに、「創価教育学会（＝創価学会）は直ちに大善生活の生きた実証」であると牧口先生は主張されました。

すなわち、「不惜身命」は、“誰でもできる” 平凡に見える日常生活のなかにこそあるのです。

要するに、私たちが日々、広宣流布のために心身を使って、大勢の人を励まし、心を尽くして仏法の素晴らしさを語っている行動のなかにこそ、「不惜身命」の実像があるのです。

(*Living Buddhism*, November-December 2009, pp.54-55, 大白蓮華 09年 1

第2回 佐渡御書（中）

生命の鍛錬こそ最高の功德

鉄は炎打てば劍となる賢聖は罵詈して試みるなるべし、我今度の御勘気は世間の失一分もなし偏に先業の重罪を今生に消して後生の三悪を脱れんずるなるべし (958 ㊦ 14行目～16行目)

宿命転換の仏法を実践する急所を教えられている一節です。

わが生命の鍛錬こそが、最高の功德です。鍛え抜かれた生命が、永遠の幸福を約束するのです。「世間の失一分もなし」——社会的罪など、全くない。ただただ、流罪は今世における宿命転換のためにあったとまで仰せです。

わが生命を鍛え、変革しゆくための仏法です。

私たちは皆、「自分の幸福の鍛冶屋」(ショーロホフ) なのです。

わが弟子よ、鋼となれ！ 劍となれ！ 真実の賢人・聖人として立ち上がれ！

大聖人は、苦闘する門下の肩を揺さぶるように励まされているのです。

「宿命を転換するのは自分自身だ。自分の中に、その力がある！」

「苦難を避けるな。本当の勝利は、自分自身に勝つことだ！」

「大いなる悩みは大いなる自分をつくる！ 永遠の勝利者となれる！」と。

(*Living Buddhism*, November-December 2009, pp. 71-72, 大白蓮華 09年2月号 53-54 ㊦)

第6回 兄弟抄（下）

「心こそ大切」の勝利の人生を

心の師とは・なるとも心を師とせざれとは六波羅蜜經の文なり。

設ひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして只法華經の事のみさはぐらせ給うべし (1088 ㊦ 15行目～16行目)

「心こそ大切なれ」(1192 ㊦) です。

「心こそ大切に候へ」(1316 ㊦) です。

「心」には、生命に無上の尊極性を開く力があります。一方で、無明につき動かされ墮落するのも「心」です。したがって「心」の変革こそが一切の根幹となります。

その時に、凡夫の揺れ動く自分の「心」を基準にしては、三障四魔の烈風が吹く険しき尾根を登ることはできません。絶対に揺るがない成仏の山頂を見据えて、「心の師」を求め抜くしかありません。それが「心の師とは・なるとも心を師とせざれ」との一節です。

「心の師」——断固として揺れ動くことのない不動の根拠とは「法」しかありません。したがって、「法」を悟り弘める仏の説き残した「経典」が大事になります。私たちで言えば、「御本尊根本」「御書根本」の姿勢が「心の師」を求めることになります。

そして、「法」と私たちを結びつけるのが、仏法実践の「師匠」の存在です。自分中心の慢心ではなく、師弟不二の求道の信心に生き抜くことが「心の師」を求める生き方にほかなりません。

そして、どこまでも「心の師」——「法」を根本として生き抜くことを示されているのが次の一節です。

「たとえ、心を煩わせる、どのようなことがあっても、夢と違って、ただ法華経のことだけに専念していきなさい」

いかなる事象も、永遠という壮大なスケールから見れば、すべて一時の夢の出来事にすぎない。「法」は永遠の存在です。ゆえに、三障四魔に敗れて「法」から離れてしまえば永遠の後悔を残してしまう。ただ「法華経の事のみ」、ただ広宣流布を見つめて、永遠の勝利のために信仰を貫いていきなさいとの仰せです。

現代において、「只法華経の事のみ」という「心の師」を求める生き方を堅実に歩んできた学会員は皆、見事に勝利の実証を示しています。日本中、世界中に庶民の信心の英雄は数多くおられます。その方たちこそ、「広宣流布の宝」です。また、「人類の宝」です。「法」を根幹として、また「師弟不二」に徹して、自身の宿命を転換し、何ものにも揺るがぬ幸福境涯を確立されています。同時に、社会の繁栄、世界の平和のために尽力し、自他共の幸福の実現という無上の人生を歩む。この宝の如き学会員を、日本だけでなく世界中の知性も賞讃する時代に入りました。

(*Living Buddhism*, March-April 2010, pp. 75-76, 大白蓮華 09年6月号 50-52
ページ)